

「いのちをまもる」人々の活動と課題

後藤 秀昭

熊本いのちの電話 研修委員長



略 歴

1993年6月～
社会福祉法人熊本いのちの
電話研修委員

2008年4月～
社会福祉法人熊本いのちの
電話理事、研修委員長
(現在に至る)

わが国における自殺者数は、2003年に3万4千人となりピークに達した。2010年以降は減少傾向となり2019年に2万169人まで減少したが、2020年は2万1,081人と微増している。この現状は先進国(G7)と比較して高い水準(自殺死亡率)であり、自殺はわが国の深刻な社会問題である。

自殺者は60歳以上が最も多く、ついで40歳代、50歳代の順である。高齢者や働き盛りの年代に自殺者が多いことは社会経済に与える影響も大きい。さらに特筆すべきは、15～39歳の死因の第1位が自殺という現状である。その中でも学生・生徒の自殺者数は2016年以降増加傾向にあり、特に女性の児童・生徒の自殺の増加が顕著である。また昨今の著名人(芸能関係者)の自死後の自殺者数の増加も看過できない。

日本財団の自殺意識調査(2021年)によれば、「本気で自殺したいと考えたことがある」と回答した人が24%、その内「それは1年以内のことだ」と答えた人が27.7%いた。この1年以内の自殺念慮の原因は、健康問題や家庭問題、経済生活問題が増加したが、全体では家庭問題が最多であった。

自殺の原因には健康問題や経済・生活問題をはじめ、家庭問題、勤務問題、学校問題等があり、これらの要因が連鎖して自殺行動を起こすことが指摘されている。また自殺のリスクとして、自殺未遂の経験や精神疾患の既往、喪失体験、他者の死の影響のほか、サポート不足が挙げられている。一方、自殺を防ぐ因子として心身の健康や安定した社会生活、利用可能な社会制度のほか、支援してくれる人や支援組織の存在、本人が頼りにしているものや支えになるようなものの存在が指摘されている。

以上のように自殺の原因やリスクは複合的で多因子に及ぶが、防止するためには「ひと(他者)」の関与や介入が必須である。いわばゲートキーパーたる「ひと(他者)」の存在がかかせない。

シンポジウムでは、人が成長、発達する場である学校、生活の経済的基盤を確保しつつ社会関係を構築、維持、向上する職場、家庭生活の場でありコミュニティとのつながりの場である地域において、自殺予防活動を実践されているシンポジストと共に、「いのちをまもる人々(ゲートキーパー)」の育成や啓発にフォーカスしつつ、さらに組織や機関、施策や制度上の自殺予防活動の実際や課題について検討していきたい。